

御勅使川扇状地の観音信仰 久本寺の鰐口

奉 観音鰐口

大旦那

中蔵五郎次郎

□ 中蔵

五月十八日敬白
享徳三戌年殊者施主子孫繁昌所



久本寺の鰐口

下今諏訪の久本寺に、横幅約十五センチ、厚さ六センチあまりの小さな鰐口が伝えられています。鰐口は、神社やお寺の軒下につるされ、参拝者が綱をふり動かして鳴らす道具で、横から見ると、ワニの口のように見えることからそう呼ばれています。

久本寺の鰐口は、表面に、

奉 観音鰐口 大旦那 中蔵五郎次郎
□ 中蔵
五月十八日敬白

享徳三戌年殊者施主子孫繁昌所

と刻まれることから、室町時代の享徳三年（一四五四）に子孫繁栄を願って「観音堂」に奉納されたものとわかり、現在は、県の指定文化財になっています。

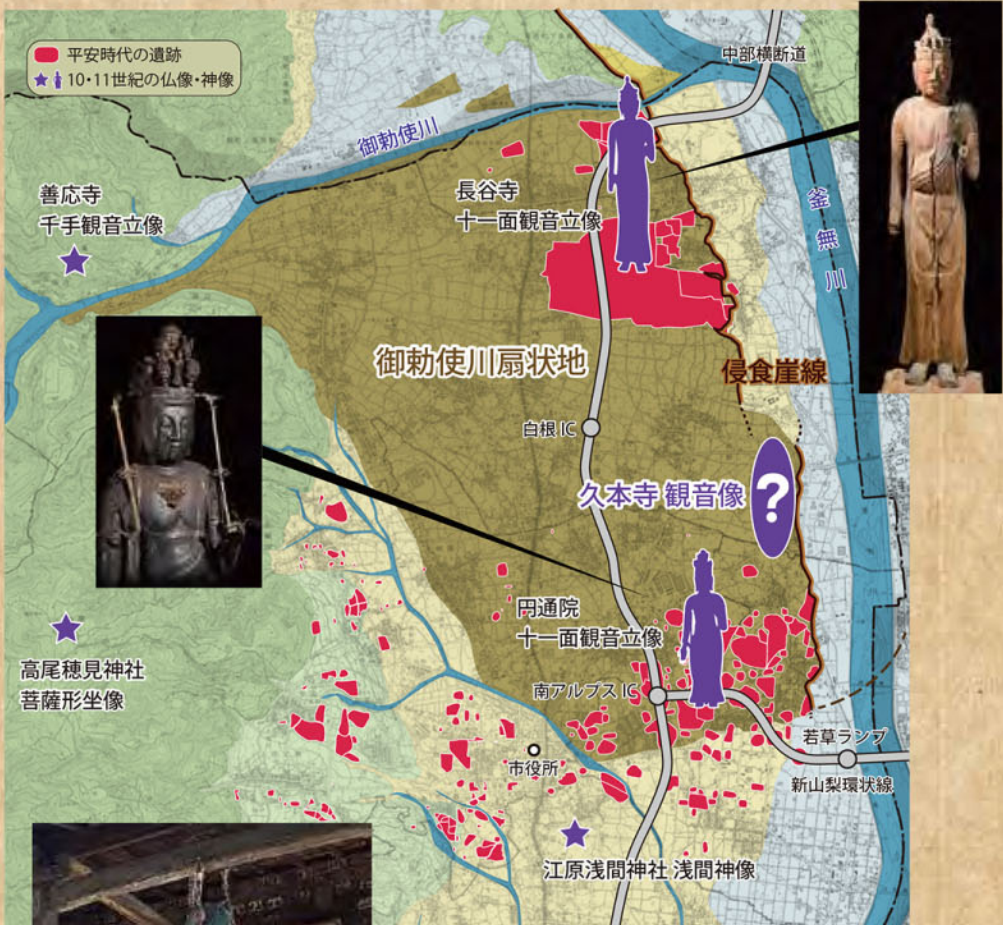
お寺の言い伝えによれば、平安時代に奥州（現在の東北地方）をひろく支配し、康平五年（一〇六二）に朝廷に討たれた武将、安部貞任の末裔が下今諏訪の地に逃れ、この観音堂に身を寄せたとされています。久本寺は、その子孫である安部六之進久友（後に日蓮聖人の直弟子となり、久本房日元）の息子で、身延山第三代法主となった日進によって、文保三年（一二三九）にゆかりあるこの地に開かれました。

観音堂は、江戸時代の天明年間（一七八一〜八九）に焼失してしまいましたが、このような言い伝えは、観音像が納められたお堂が、鰐口が奉納された室町時代より前の鎌倉時代、あるいは平安時代には存在していた可能性を示しています。

ところで、平成二十三年十月号のこの欄でも紹介したとおり、現在南アルプス市には、約二九〇〇体の木で彫られた仏像や神像があると推定されていますが、その中で平安時代半ば、十一世紀まで遡るものはわずか五件（七体）にしかありません。そのうち二件が、御勅使川扇状地の末端部にあって、ひとつは、榎原にある長谷寺、もうひとつは寺部にあった円通院のご本尊で、奇しくも、ともに「十一面観音像」となっています。それぞれ場所は離れていますが、いずれも、平安時代の遺跡が濃密に分布する範囲の中心にあることから、平安時代の少なくとも十一世紀頃には、御勅使川扇状地において（十一面）観音様が広く信仰を集めていたことが分ります。

そう考えると、このようなエピソードを持ち、同じ御勅使川扇状地末端に位置する久本寺にあったとされる観音像が、この頃のものであった可能性は十分ありますし、もしかしたら、現在釜無川に侵食され、崖線となっている下今諏訪地区の東側に、かつては平安時代の大規模な集落があったとしてもおかしくありません。

平安時代は、それまで耕作に不適な干ばつ地帯として開発の手を拒んできた御勅使川扇状地の扇央部に対し、新たに「牧（牛馬の飼育施設）」の経営という手法を中心にして、総合的な開発が試みられていく時期でした。最新の研究では、九世紀中頃から顕在化する扇状地の開発を担った人々の一部が、この頃東北地方から移住した「俘囚」と呼ばれた人々であった可能性が指摘されています。久本寺の鰐口が存在は、時期にも幅があり、直接とはいいませんが、このような、地域と東北地方との意外なつながりを暗示しているのかもしれない。文／写真 文化財課



鰐口の使用例（写真は、榎原の長谷寺）



妙栄山 久本寺（下今諏訪）

(4) 数ある観音菩薩の種類のひとつ。頭部に11の顔を持つ
(5) 平野修 2017 「武蔵と甲斐における俘囚・夷俘痕跡」『俘囚・夷俘とよばれたエミシの移記と東国社会』など

(1) サメの古名ともいわれる
(2) 史料によっては、文保2年
(3) 円通院の作例は三尊像で、3体がセットになる